九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

境忠一著『詩と土着』

瓜生，清
九州大学大学院修士課程

https://doi.org/10.15017/12167

出版情報：語文研究. 35, pp.63-64, 1973-08-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

境忠一著『詩と土着』

瓜生　清

氏は独自の一貫した視座のもとに、近代詩について考察を進めておられるが、ここに前著『詩と故郷』の続篇とも目される本書の刊行をみた。あとがきでも述べられているように、本書執筆の動機は〈『詩と故郷』では表題のように、「故郷」を手掛りとして、近代詩の変遷を考えたのだが、「故郷」というモチーフではそこに限界があることは知れていた。むしろ、その限界を契機として書いたともいえる。〉このように本書は、前著をうけて近代詩史への明確なアプローチの姿勢を一層成熟させた意欲的な論集である。構成は、巻頭に序説とも言うべき近代詩史論を据え、次いで宮崎湖処子以下八名の詩人が論述されている。

詩と土着―近代詩源流考　氏は先ず近代詩の歴史を概括して、近代詩の宿命的な断層の現象に注目される。それは〈新しい詩人が出現する毎に、前時代の詩人が否定され、時代の断層が出来る〉ことであるが、ここで近代詩が前代からの詩の継承成熟の契機を見失い、それへの否定によってしか新しいフォルムが創造されなかった要因を探られる。

宮崎湖処子―明治二十年代の湖処子　湖処子の出世作とされる『帰省』は、湖処子の生涯に一貫した心情を窺わせる作である。それは当時の立身出世主義の巷と化していた東京に対する永遠の理想境を故郷に夢みる心情であった。そして心情的には永遠の桃源境につながる故郷に愛着しながら、それを自己批評として清算したために、湖処子の詩は真のうたうべき対象を喪失し、時の推移をかこつ悲哀の感傷に流れていった。

北原白秋―その思想性について　『思ひ出』の序詩が、白秋が幼年時代を過した柳河の田園の風物に重なっていることに注目し、ここに白秋以前の象徴詩の現実遊離に比して、白秋の〈現実奪回〉の主体性があったと説かれる。一方白秋の文学挫折をもたらした要因として例の姦通事件が考えられ、白秋はこの苦悩と絶望から〈宗教的な法悦によって逃れようとした。〉そして思想的な煩悶を回避して〈自己救済の表現〉に向ったことにその挫折があったのではないかと断じておられる。

三富朽葉―その位置について　象徴主義の正統的な紹介者であり口語散文詩の開拓者でもあった朽葉は早逝したが、昭和

に入り本格的になった象徴主義の魁をなした詩人として近代詩史上再評価されるべき詩人である。

加藤介春―その形而上性について　介春の詩史的な位置付けは、口語自由詩運動の側面からだけであり、介春の詩の〈人生への懐疑〉を忘却している点に近代詩の不幸があった。人生の暗部に目を開かれた介春は、大正詩壇の人間肯定の讃歌の世界とは無縁の詩人であった。また期せずして萩原朔太郎と〈反時代的な発想で共通している〉ことにも注意を促しておられる。そして二人の近親関係が指摘されるだけ、朔太郎の成功と際立った対照を見せている介春を〈形而上性に乏しいこの国の近代詩の運命〉を生きた詩人と説かれている。

中原中也―その土着性について　ダダイズムの精神は中也の生涯を貫く一体の縦糸であった。中也と対極的な〈表現の世界に終始〉した三好達治との比較検討は、巧まずして両者の詩風の相違を明示し、中也独自の詩の世界を示唆して興味深い。『在りし日の歌』以降、中也の詩は〈庶民性からの離脱〉と〈円環の世界への希求〉の方向で、一元的世界をうたうに従い土着的なものは払拭されていくのである。

伊東静雄―その位置について　時代の運命を身をもって予示し続けるのが詩人の姿であるとすれば、伊東静雄は昭和十年代の日本を身を堵して生きた詩人と言える。自己の意識の深部に沈潜した詩人のみが、イデオローグ的な似而非国民詩人と峻別される時代の範形となり得る。ここで氏は、伊東の詩の変遷を伊東のひたむきな精神の軌跡として追尋されている。

蔵原伸二郎―原始への渇望と文明批判について　『東洋の詩魂』は『東洋の満月』に表現された蔵原の生涯に渡る基調である原始への憧憬を論理的に究明しようとしたものである。この書は、一貫した主題として、〈平面的な世界が開発され、情報化された現代〉の詩の本質的な盲点が、〈抒情の平面への悦び〉のゆきづまりとして鋭く裁断されている。

谷川雁―原点の思想をめぐって　氏の結論のみ引用させて頂く。〈「谷川雁ほど、自己の夢、その苦しげであるが壮大なヴィジョンに忠実にこの戦後を生きたものは居なかった。」という評価は決して誇張されたものではない。しかし、自己の夢に忠実であったために、谷川雁は現実の力学にふりまわされてきたともいえる。『原点が存在する』時代のように、みずからの感覚の底にあるものを指摘していた時はまだよかった。その指示にしたがって、行動の世界へ踏み出した時、現実は谷川雁個人を越える力で動いていった。彼は懸命に現実を越える理論を組み立てていったが、結局自己の由来する階級から一歩も外へ出ることはできなかった。〉

群盲象を撫でるような要領を得ない妄評を重ねてしまい、無手勝流の紹介に終ったが、本書の魅力の過半は、氏が現代詩の動向への注視から培われた問題意識を踏まえて、近代詩の成立発展の過程へ逆照射を試みられる批評性にあろうかと思う。さらに、無味乾燥な悪しき意味の考証に堕すことなく、柔軟な鑑賞眼の冴えと味読とをもって、詩人の意識の深部をまさぐり、作品の内部構造を腑分けされてゆく手際は頗る魅力的で、詩の分析についての方法論的な意味で教えられる所が多いのも、本書の細部に渡って見られる特色である。また詩史的なパースペ

クティブに示唆する所が多く、巨視的な視野のもとに詩人の内部の精神の軌跡を陰影深く描き分けている所など、詩人論として出色のものと言える。最後に、本書のもつ新鮮な提言の意義を汲みとれず、見当違いの言及も多々あることと思うが、御容赦をお願いする次第である。

（昭和四十六年十二月　葦書房刊　二三七頁　七八〇円）

受贈雑誌　47年10月～48年6月　⑤

文芸と批評3巻10、4巻1／肇国353～360／白路27巻10～12、28巻1～6／日本文学研究（高知日本文学研究会）10／近世文芸稿（広島近世文芸研究会）17 18／連歌俳諧研究43 44／俳文芸1／金沢文庫研究19巻4／能　研究と評論1／能学思潮60～62／海事史研究（日本海事史学会）19／説話（円満社）4／民間伝承15巻1～16巻7／豊臣物語4／松柏　特集号／噂3巻3／近代文学研究7

◇学会集報

▼講義題目・昭和47年度第二学期

（大学院）	国語学特研	国語学史（古言別音抄）	春日　教授
（大学院）	仝　演習	将門記	春日　教授
（大学院）	仝　特講	敬語の展開	春日　教授
（学部）	仝　演習	万葉集　巻七	春日　教授
（大学院）	仝　特研	方言学	奥村助教授
（大学院）	仝　演習	音韻史	奥村助教授
（大学院）	仝　特講	国語学の諸問題	奥村助教授
（学部）	仝　演習	近世語	奥村助教授
（大学院）	国文学特研	日本文学史研究の諸問題	今井　教授
（大学院）	仝　演習	日本文学研究史―源氏物語をめぐって―	今井　教授
（大学院）	仝　特講	平安女流文学の基盤	今井　教授
（学部）	仝　演習	詞花懸露集	今井　教授
（大学院）	仝　特研		中野助教授
（大学院）	仝　演習	艶道通鑑	中野助教授
（大学院）	仝　特講	近世文学の背景	中野助教授
（学部）	仝　演習	洒落本	中野助教授
（大学院）	仝　特研	現代文学史研究	重松　教授（九大教養部）
（大学院）	仝　演習	作家研究の方法	重松　教授
（大学院）	仝　特講	近代文学作品研究	重松　教授
（大学院）	国語学臨構	国語史の諸問題	浜田　教授（京都大学）